第１９回アクラスZOOM寺子屋　感想

介護の日本語の重要性は現場でどのくらい必要とされているのか。専門分野の日本語講師または専門外の日本語講師としてのサポート体制をつくる方法はあるか。最近よく考えることです。介護現場でコミュニケーション研修を行う際に、キャリアアップについてもお話ししますが、日本語能力の向上は後回しになっている印象を受けます。社協と11月研修のお打ち合わせがありますので、今回発刊されたテキストの活用も含めて、今後の現場に必要な研修が何がご提案できないかも考えていきたいです。利用者様の安全はもちろん、全ての職員が働きやすい環境、そして、言葉の壁が低くなるような試験対策など・・・日本語講師ができることをもっと考えていきたいです。（専門職とチームが各地でできたらよいですね。）

日本語教師になってから、NLP、ポジティブ心理学を学びました。そして最近「やさしい日本語」を学び、「指示命令がうまく伝わらずに困っている」という介護の現場でニーズがあることを知りました。「やさしい日本語」だけを考えると、何でもかんでもやさしく、語彙レベル、文法レベルを落として、必要最低限の短い文にしてしまえば良いと考えがちです。介護福祉士の資格者に求められる必要な語彙を使わなくさせてしまう状況（使わなくても済んでしまう状況）にしてしまうのは、外国籍スタッフの成長という面で、良いことではないと認識しました。介護現場で「やさしい日本語」を導入する際、どういうことに配慮が必要なのかという気づきが多く、視野を広げて改めて考える良いきっかけになりました。参加できて良かったです。ありがとうございました。

ちょうど昨日から、技能実習生の入国後、介護の日本語を手探りで教え始めたところでしたので、根っこに持っておくべき考えを聞くことができてとても有意義な時間でした！

リフレーミングを日本語教師といっしょに、言語聴覚士の仕事にも、家族や友だちと接するときにも活かしていきたいと思います。
OJTになるけれど、やってみて相手の反応を得るところまでが練習や実践だなと考えます。

私が知っている２年の介護福祉士養成施設と比べても３年という就学期間があるとより深く介護について学んでいるということがわかりました。
また留学生であっても介護について深く考える機会があり、このような過程を経た外国人介護士は今後の介護現場の中核となる人材に育て行くのだろうと思いました。
一方で私が関わっている特定技能介護では、制度的に研修というものが組み込まれていないので、来日前にCBTの試験に合格しただけの人材では、介護現場で何とかやっていけるための必要最低限の日本語研修しかできず、実態としては介護技術などについては介護現場に丸投げしているという現実もあります。
今日取り上げられていた手書きの日本語についてですが、私が関わる特定技能では正直手書きの日本語は扱う余裕もなく（介護現場のIT化にも期待しつつ）、口頭のコミュニケーションを最優先して扱っていますが、改めて本当にそれでいいのかを考えさせられました。
個人的には在留資格や人材の適性により求める日本語や介護技術は多様であってもいいと思っていますが、それが日本語能力が低くてもいいというような悪い方向に流れていかないよう、今後も現場に関わりながら介護の日本語について考えていきたいと思います。

嶋田先生、貴重な学びの機会をいただき、感謝いたします。
小倉和也先生、介護の本質をわかりやすく教えてくださり、ありがとうございました。良い先生に教えてもらえる留学生さんや、一緒に働ける先生方がうらやましいと思いました。
介護の仕事はきれいごとでは済まないことが多いですが、同時に人の人生に関わる尊い仕事でもあると改めて思いました。
私は働きながら学んでいる外国人介護士さんの支援をしていますが、メンタル・ケアも含めて、もっと寄り添っていきたいと思います。
ありがとうございました。

昨年 初任者研修を受けた時、大切な介護のこころは教わりましたが、そこに文化の差も起こりうるということまでは思いが至りませんでした。とは言え、同じ日本人同士でも価値観も強みも違いますから、それぞれの特性をいかに仕事に活かしてもらうか、それを一緒に考えていく伴走者のような仕事でもあると思いました。色々な気づきをありがとうございました！

現在、EPAの介護福祉士候補者の初期日本語教育にも携わっているので、今日の研修は本当にためになりました。嶋田和子先生　小倉先生、本当にありがとうございました！
まず最初の「2番目は何？」から心を鷲掴みにされました。早速の自分の授業にも取り入れて行きたいと思っております。
また、自分のコアビリーフについて改めて考える良い機会にもなりました。

性格特性判断もとても興味深かったです(わたしは何故か協調性が6だったのですが、他は８と9でした)。学習者や候補者の方にもぜひやってもらおうと思いました。
リフレーミングは、留学生の就活指導などで志望動機、長所短所を考える際によく使っていたのですが、今日改めて「言いたい言い方」ではなく「相手の尊厳に配慮した心に響く言い方」を考える大切さについて気づきが深まりました。
アイメッセージは、子育ての際にいつも意識していましたが、ダブルバインドや言葉による拘束について、今日の小倉先生の具体的な例を含むお話を聞いて改めて考えさせられました。

最後に、ご紹介いただいた「手紙」の歌詞について。この歌詞を読んで、気持ちはわかるのだけれど、そして親にこう言われたら素直に頷けるのだけれど、わたしは子供たちにこうは言いたくないと感じてしまいました。どうして言われるのはOKなのに、自分は言えないのかと改めて歌詞を見直していて、この歌詞は「アイメッセージ」の形をとっておらず「～して欲しい」の形だからではないかと思いました。本当に素直じゃないわたしですが、これからも言葉を大切に、歩んでいきたいと思います。今日は本当にありがとうございました！(今回は珍しく当日に感想を書けました！)

小倉先生の優しいお人柄が、介護という非常に難しい職業の魅力を学生たちに伝えていらっしゃるのだなと感じました。介護の専門用語を使って、具体的に報告書を書くことは外国人にとっては大変なことだと思いますが、皆さん前向きに取り組んでいる様子が伝わってきました。私自身、介護士をして働いているインドの人たちの日本語教育をオンラインでしていますが、皆さん明るく前向きに取り組んでいます。「今の仕事が本当に楽しい！」と言っている人もいて、私達の日本社会はこのような人たちに助けられているのだなあ、と実感すること多々です。報告書に書く字までうるさく言ってはいけませんね。私がお付き合いのある介護施設では、書いたものを自動的に活字にするソフトをいち早く導入しており、このようなＩＴを使った工夫も必要なのだと感じました。今日は本当にありがとうございました。

介護現場でのコミュニケーションにおいて大事なことは、介護に限らず大事なことだと感じました。子育ての分野でも聞いたことがあることばかりで、人間同士のコミュニケーションの根本なのだなと感じましたし、何度聞いても実践できていない自分にも気づかされました…。また、PDFで見せていただいた実習記録で、実際の介護を学ぶ留学生にとってどのような日本語力が必要なのかをイメージすることができました。誰が、だれに、と言うことがはっきりしないと命を扱う現場では重大な間違いが起こりうることだと思います。教師も学習者自身もその自覚を持つことが大切だと感じました。また、この実習記録をつかったBORでのタスクは「間違いに注目する」ということでしたが、誤用に目が行く前にむしろこんな大変なことをポジティブに頑張っているんだなあと、学習者の方の姿を想像して頭の下がる思いでした。

アクラス寺子屋、初めての参加でした。
小倉さんのお話は、とても勉強にになりました。
「人間一人一人が唯一無二の存在」尊厳を大切にする。思い込み（コアビリーフ）押しつけではなく、人それぞれが持っている価値観を大切にする。という言葉が心に響きました。
介護の中では、コミュニケーションは欠かせないものです。相手の気持ちに寄り添う気持ちを、これからも大切にしていきたいです。
参加させていただき、本当にありがとうございました。
これからも、「介護専門日本語教師」として世の中に役立てるよう、日々精進したいと思います。嶋田先生、ありがとうございました。

今回のZoom寺子屋は、小倉先生から”介護の心”をいろいろな角度から学ぶことができました。

私は日本語教師として「介護の日本語とは何か。必要な学習内容は何か。」という点についてばかり考えがちでしたが、まずは基本となる”介護の心”を学ぶことの重要性を強く感じました。
介護に必要な”心”を理解することで、学習者が利用者さんに対して、本当の意味での思いやりがある態度を身につけることができるようになると思います。これにより、非言語的な手段や、準言語、言語コミュニケーションをより効果的に活用したケアが可能になるでしょう。このような学びを支援することが日本語教師の大切な仕事だと感じました。

「スピーチロック」や「コアビリーフ」についても、自分自身を省みることができました。そして私自身が苦手としている「Iメッセージで伝えること」や「リフレーミング」も、今後の自分の課題として取り組んでいきたいと思います。
日本語教師として何ができるのか、何を知らないといけないのかについて学びを深めることができた、あっという間の２時間でした。

介護や日本語教育だけではなく、人間として大きな学びの広がりを感じる貴重な機会となりました。この回に参加できて幸運でした。小倉先生、嶋田先生、ありがとうございました。

小倉先生のお話がとてもわかりやすく、もっともっと教えていただきたいと思いました。介護経験のない私にとっては、介護施設現場の様子もわかりとても勉強になりました。また、記録では私としては「伝わる」記録で上手に書けてる。と思ったのですが、「後日、記録を読んでその時の状況が説明できるような記録を書かないといけない」とおっしゃっていたので、具体性がないことに気づかされました。
本当に勉強になりました。ぜひ、第2弾、第3弾の企画をお願いいたします。ありがとうございました。

介護に関して、これまで直接かかわったことがなかったのですが、近頃母が体調を崩し家事の手伝いをしています。本人は虚弱になって今後を不安がっています。当然ながら介護の必要性が出てくるものと思っています。今回の講義での介護される側の気持ちを綴った歌を聞いて、親の思いをそのまま代弁しているようで身にすまされるようでした。良い経験をしました。本当に、少しの思いやりが大きな助けになるのだと気づきました。
介護の日本語指導について、実習生が現場での経験を経ることで彼らの日本語に磨きがかかってくる過程が見て取れるようでした。その過程において、現場での細かな指導が必要になり、専門用語の指導だけではなく、それらを使って具体的な状況描写ができるようになることにも気を配ることも重要になってくるのでしょう。
介護の現状が身近に迫る今日この頃、介護される側の身になって思いやりを忘れてはいけないと思いました。

楽しい講演を聞かせていただきました。ありがとうございました。コミュニケーションに関しては、伝える、伝わるためには自己覚知し、自分の強みを知っておくこと。リフレーミングを行い相手のいいところを探しコミュニケーションにつなげていくことなどを学ぶことができました。記録までなかなか指導する機会がありませんが、「人とつながる介護の日本語」を使い、５W1Hを使った報告ができるように指導していこうと思います。 本日はありがとうございました。
大変貴重なお話ありがとうございました。介護専門教育と日本語教育がどのようにかかわりあい、つながりあって外国人介護人材を育成していけるのか、2010年からEPA介護福祉士候補者に関わって以来、ずっと追い続けているテーマです。小倉先生からは今までも授業を通して多くのことを学ぶ機会を得ていますが、今回、改めて介護のコミュニケーションの基本を学び、「介護と日本語」のつながる点を考えることができました。他領域と考えがちですが、生活する中で「人」と「人」とのコミュニケーションを考えることは共通しています。今日の学びを今後にに生かしていきたいと思います。 小倉先生が講義の中で何回か「暗いイメージがある介護」とおっしゃっていましたが、今まで何度となく小倉先生の講義を拝聴してきた私の印象は、「暗い」イメージはありません。現場では大変な苦労があり、スタッフも辛いこと、苦しいことはあると思いますが、人間の尊厳を大切にし「人生の最終章」を輝かせる介護の仕事はすばらしいです。そのように思えるような教育をされている小倉先生もまた素晴らしい介護の専門家でいらっしゃいます。今日は本当にありがとうございました。
介護の世界は、避けては通れぬ道ですが、頭でわかっていても自分の親をお世話するのも苦手意識が働いていました。今回の講習では、そんな私の考えや思いをもう一度考え直すべきだという気づきを与えてくれました。学ぶ内容がとても深く、尊く、これらを学んでいる実習生は本当に偉いなと思わざるを得ません。 今回お話してくださったコミュニケーション技術は、全ての職種に形を変えて必要なものであり、この思いを持って人と接することが大切なんだと改めて感じさせられました。 価値ある2時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。
「“伝える伝わる”介護のコミュニケーションを考える」というお話のテーマを最初に見たとき、利用者⇔介護職、介護職⇔介護職のコミュニケーションが思い浮かびましたが、現場では介護職の所属介護施設、利用者の家族という周辺環境、実習、インターンなら大学、専門学校という教育機関、さらに関係者は広範囲におよぶということがイメージが広がっていきました。しかも、ワークから固定概念、先入観はそれらの関係をストップしてしまうということも感じました。 2008年にEPAインドネシア日本に基づく介護福祉士候補者が入国して以来、日本語教育は４年滞在後に受ける国家試験を中心に議論、教材開発が進んできたように思います。EPA関係だけでも、フィリピン、ベトナムと日本で働く外国人介護職は増加し、在住外国人、専門学校卒業生、技能実習生、特定技能と増えてきたのは関係団体の切実な要求があったものと想像しています。いずれのスキームでも国家試験に合格することは、日本で働くことを保障するだけでなく、実践的な知識の積み重ねが必要でしょう。 私の主な関心は外国人介護職スタッフと利用者のコミュニケーションではありますが、すべてのステークホルダーの関係の中で日々活動、コミュニケーションが行われているし、日本語教育に中でも、介護の考え方、知識を踏まえて日本語を学んでいくことが大切かと思いました。

小倉先生の介護への熱い想いが伝わる寺子屋でした。 介護職が理解しておくべき内容がぎっしりと詰まったお時間でした。 ありがとうございました。 私もミャンマーで日本でこれから介護の仕事をはじめる若者に人とつながる介護を使って日本語で介護を教えていますが、リフレーミングやアサーティブなど日本人でも難しいことを理解してもらう、そして実際に使いこなせるようになるにはどうすればいいか苦労しています。 利用者主体が仕事に慣れてくると介護職主体になってしまうということもコアビリーフの押しつけ含め気をつけている点です。今回のお話で私が伝えようとしていることの方向性が間違っていないのだとちょっと安心しました。 また機会がありましたら外国人介護職への日本語・介護指導者向けのセミナーなどやっていただきたいなと思いました。 年齢が若い介護希望者には介護留学をすすめています。うちの学生も小倉先生のところに留学させたいと思いましたがミャンマーの学生はこれまで受け入れされておりますでしょうか？
今回、介護にまつわる日本語ということで介護の専攻をなさっている学生の方々がどのくらいの学習時間を経て、どんなプログラムにそって学習をなさっているのかが具体的に伺えて良かったです。 自分が日本語教師になった頃、この分野はこれから育つんだろうなと思ったのと、その後養成講座をお教えしていた時、ケアマネージャー資格をお持ちの方が日本語パートナーズに応募したいからと受講にお見えになっていました。(その時は介護職場一旦離職なさっていたご様子でした)これからはこういう資格を持った方が多く日本語教育に入ってくると思っていましたが、今回の研修でこれからは留学生でこれらの資格を生かした仕事をなさった方が、現場での教育や教育機関での学習のコーディネーターとして活躍する日が来るんだろうなと感じました。 小倉先生の今回のセミナーでのお話を伺う間にも様々な工夫がされており、普段から指導の振り幅というか発想や様々な目配りが行き届いてのこれらのカリキュラムなんだなぁと感じることができました。 今は介護関係の学習を私自身はしておりませんし、ここに特化した分野に入ることがあるかは不明ですが、コミュニケーションというものの感覚としては様々な公共サービスなどにこれからは外国籍の方の力を生かしていかなければならない日本にもうすでになっていると思います。そういう仕事に関しても今回のような心配りやVECなど一部の活動の場でも行われている協働で何かを知っていく活動なども似ているなと感じた次第でした。 今回も大変いい学びになりました。BORでご一緒した方々と診断結果をお話ししたものについて話し合うのも楽しかったですし、また曲の視聴につきましてはこういう気持ちを持った人で世界が溢れたら、人と争うことがこんなに待たれて生まれてきた私たちを見てくれた人をゆっくりみることに時間をかけたい過ごしたいと思ったらできなくなるのになぁと感じる時間にもなりました。 小倉先生、嶋田先生、同じお時間をご一緒した皆様、今回もありがとうございました。

今回の講座で介護を学ぶ留学生の様々な現状を伺いましたが、驚きの連続でした。

●国や文化の違いに配慮した指導

まず、介護福祉士養成課程における国や文化の違いに配慮した指導内容について伺いました。日本の介護現場では利用者の「尊厳」や「自己決定」が大切にされていること。また、介護されることを申し訳ないと思う利用者の「遠慮」や「本音」を理解してコミュニケーションを取ることが求められること。さらに、アクセサリーや清潔についての考えの違いや健康や食事に関する考え方も国や文化によって違いがあり、こうしたことを一つ一つ指導されているそうです。平均寿命が短い国から来た留学生は長寿の国、日本で初めて高齢者と接するというお話からも、指導される先生方と介護を学ぶ留学生の苦労が並々ならぬものであると気づかされました。

●数々のコミュニケーションスキル

特にコミュニケーションスキルについては日本人の私たちでも簡単には習得できない高度な内容で驚きました。自分が大切にしている価値観を「コアビリーフ」と呼ぶそうですが、介護をする利用者の方は当然ですが、こちらが思っているような価値観を持っているわけではありません。ですから、介護者は利用者さんのペースを大事にし、共感的な理解や態度で接することが必要になってきます。その時、自分の価値観は一旦わきへ置いておき、「した方がいいが、しなくてもいい」「するに越したことはないが、しなくてもいい」と思考を変えてみるといった心の持ち方も学ぶそうです。理解はできますが、常に自分の価値観をコントロールしつつ、介護を行うのは、なかなか難しいことだと感じました。

また、利用者のネガティブな訴えをポジティブに考える「リフレーミング力」を養成されているお話も非常に興味深く伺いました。利用者の「できない！」といった否定的な訴えを「自分の意志を伝える力を持っている」とポジティブにリフレーミングすることで、利用者さんへの見方や言葉かけも暖かいものになっていきます。他にも自分を主語にして伝える「アイメッセージ」や「アサーティブ」の考え方も取り入れているそうです。感覚や経験重視ではなく、科学的な知見に基づく介護教育をされているお話にも深く共感しました。

●介護記録

何よりも驚いたのは、留学生書いた介護の実習記録です。Ｎ３レベルの学生さんの日々の実習記録を見せていただいたのですが、内容を拝見して、思わず「すごい！」と感じずにはいられませんでした。毎日実施した内容を日本語で書くだけでも大変なことだと思うのですが、そこに書いてあったのは、明確な実習目標に対して、自分が実施し、学んだことや課題が、きちんと整理されて書かれていました。「食介」や「個別レク」といった専門用語も使われており、非漢字圏の学生さんが書いたそうですが、難しい漢字も丁寧に書いてあり、とても読みやすい記録でした。記録の最後には必ず、今回の課題を次回の実習ではどのようにするのか、その抱負が力強く書かれているのも印象的でした。小倉先生のお話では専門用語の使用が足りないとか、具体性が弱いなどのご指摘もありましたが、日本語力の未熟さはあるものの、その記録には専門的視点での考察もみられ、素晴らしいと感じました。

●最後に

以上のように、介護における国や文化が異なる中で、高度なコミュニケーションスキルを学び、国家試験を視野に入れ、実習とその記録における指導もされている現場のお話を伺い、介護と日本語の双方向の教育がいかに高度なものか、よくわかりました。コミュニケーションスキルの数々や自分の課題を抽出するといった記録については今後自分自身の教育現場でも応用できそうだと感じました。小倉先生、嶋田先生、たくさんの学びをありがとうございました。

今回の研修は、介護の現場の状況を第３者として知るだけでなく、自分自身が置かれている
高齢の両親の介護についてとても考えさせられるものでした。
もちろん、これから外国人介護実習生への日本語カリキュラムを作成していかなくてはなりませんが、その前に　介護という言葉の持つ　大切なもの　大切な心は何かの根本的なことを学んだ気がします。
「尊厳」と口で言っても、実際難しい場面が多々あります。研修を受ける前と後では気持ちの切り替え言葉の使い方が変わり、自分自身が少し楽になりました。
介護の日本語の感想から外れてしまっておりますが、今回の研修は小倉先生のお話がとてもわかりやすく、時間があっという間に過ぎとても感動しました。是非小倉先生のお話をまたお聞きしたいと思います。
皆様　ありがとうございました。

思い込みが視野と許容範囲を狭くすること、自己覚知、リフレーミングは、介護士だけでなく異文化と接する日本語教師も学ぶべき内容だと思いました。また、日本語教師として記録をフィードバックするときの視点（5W1Hで具体的に書けているか）について改めて振り返る良いきっかけになりました。ありがとうございました。

貴重な機会を下さり、ありがとうございました。
外国から日本に来て、ご自身の祖父母の介護もできない状況でも、日本の利用者さんの介護をしてくださる心に、本当に感謝の気持ちでいっぱいになります。
私は、父が要介護５でなくなり、今母は要介護４になりました。自分で自分のことができるということがとてもありがたいことなんだと実感し、尊厳や基本的人権について考えを深めることが多々あります。様々な領域について、外国から来てくださった留学生へ暖かくご指導なさっている様子が、今回の研修で伝わってまいりました。実習記録など、現場の様子がわかりありがとうございました。
リフレーミングの重要性、コアビリーフを押し付けないことなど、私にとってのキーワードもありました。日本語教育に生かせると思います。
命と向き合っている重要性とも向き合いながらご指導されている姿に感動いたしました。
ありがとうございました。

小倉先生、嶋田先生、素晴らしい学びの機会をいただきましてありがとうございました。今回、非常に心に響いた内容だったため、あまりにも感じることが多すぎてどのように表現したらよいのかまとまらなくなってしまいました。私が自己紹介で述べたことは、1. 言語メッセージと非言語メッセージの両側面から「伝わる」介護の日本語について学びたい。2. 「伝わる」ということはどういうことなのか、コロナ禍でオンライン化になり、授業のあり方の変化の中でこの数年間、私が最も困難さを感じながら腐心したことは学生とのコミュニケーションであり、「伝える」「伝わる」ことの大変さ、しかも、それが"心"に「伝わる」＝「届く」ことの大切さだったことから改めて問い直したい。3. 「介護」という繊細な世界において単なる情緒的な捉え方ではなく専門家の知見を得たい。この3点でした。これらに対する回答を得る大きなヒントを確実にいただくことができたと思います。
4つの大きな学びを得ました。まず、1.「コアビリーフ」です。柔軟な思考の変化を持つことの重要性―「〇〇するべき」「〇〇なはず」「〇〇しなければならない」という自身のコアビリーフの押し付けを他者に強いていないか。という視点を持つことの自分自身への精神の鍛練を日々したいと強く思いました。これは非常に高度な魂の鍛練でしょう。人は頑張ろうとするとき、自身のコアビリーフを持つことによって生きる推進力を持つことが出来るのではないでしょうか。それを人に押し付けない、つまり多様なコアビリーフ、価値観を認め合うことがコミュニケーションの核となるわけですが、介護や病院や学校やまた会社など一貫性のあるポリシーを貫き業務などに向かう時、この判断と個々人との対応が難しく、ハラスメント問題や評価の揺れやずれなどクレーム（ここでは日本語のカタカナワードとしての意味の文句をつけるの意）に繋がる恐れがあります。日本語教育ではさまざまな出自を背景とした学習者に対するため多様性（diversity）の大切さを心得ている教授者は多いと思いますが日本という価値観の一貫性が基本となって機能している国では有機的な精神の発展や表現が困難なように思うことが多いです。
次に2. 「リフレーミング」の有用性を再確認しました。かつて工業高校で国語表現の授業を受け持ちましたが、そこでは就職活動に役立つ具体的な日本語や国語常識に関わる学びを提供しました。履歴書の書き方や企業訪問での応対、終了後のお礼の手紙の書き方、面接時の表現などです。その中で自己アピールがあり、このリフレーミング練習を行いました。自分のnegativeな面を書き出し、さらにそれをpositiveに言い換えて書き出す、さらにそのpositiveな面を具体的な自分のエピソードを加えて作文にし、最後はクラスの前でpresentationするという流れでした。謙虚さという伝統的な日本の美徳が綿々と日本人の心の文化形成として受け継がれている以上、自分自身を控えめに、そして過小評価した表現で他者に対することが時としてマイナスになることを就職を目の前にしている生徒たちへ伝える授業でしたが、今回、改めて「リフレーミング」の大切さを思い、同時に今、自分自身にも応用させて生きていく必要があると感じました。
→次のセルに続きます。

3.は「アサーティブ」の重要性です。1.「コアビリーフ」2.「リフレーミング」と連動してくる精神の鍛練の形でしょう。調べてみると、具体的には、「誠実」「率直」「対等」「自己責任」の4つを柱とし、自分の気持ちや考え、信念などを正直に率直に、その場にふさわしい方法で表現できるコミュニケーションを目指す（日本・精神技術研究所）とあります。「積極的な」「自己主張をする」という意味を持つassertiveは、ただ一方的に意見を言うのではなく相手の気持ちを配慮したうえでの自己表現・自己主張を指し、心理療法の一つの認知行動療法のトレーニングにも取り入れられており、自分も他者も対等に自己表現・自己主張ができるwin-winな関係を構築できる重要なスキルとされているということを確認することが出来ました。
（アイラーニング：https://www.i-learning.jp/topics/column/business/assertive-communication.html）これこそがこの数年間、突如、オンラインの授業になり学生たちとのcommunication障害となったことを打破する鍵だと思います。
そして4.「非言語コミュニケーション」の効用です。『対人関係の鍵、「非言語コミュニケーション」とは』
（https://yumenavi.info/vue/lecture.html?gnkcd=g007195）の中でも、東京未来大学のモチベーション行動科学部の準教授の磯 友輝子先生が非言語の重要性をいくつか指摘されています。1.時には言語以上の役割を果たす非言語の意思伝達―感情や好意を伝える際に相手に伝わりやすい非言語は、心理学者のメラビアンの研究結果によると「表情」55%、「声の調子」38%、「言語内容」7%だそうです。また、人間に必要な快適な距離感の存在です。見えないけれど人は「パーソナルスペース」があり、相手や関係性によって伸び縮みするということです。この視点もなるほどと合点がいったのですが、同時にかねてから私は別の視点から距離感の存在や一種、アンチテーゼ的な効用や必要性を感じ続けていました。感覚的に捉えていましたが言語化できませんでした。人とのコミュニケーションにおいてある意味で、言語が邪魔する局面が少なからずあるということです。なまじ言語が達者なゆえに人に何かを「伝える」時に「心」にコミットしない、つまり「伝わらない」ということです。介護のクラスの学生が日本語N3レベルまたはそれよりも下の場合があると聞いたとき、日本の介護の光を少し見たような気がしました。彼らは日本語が発達段階で介護が必要な人々に対するときに全力で非言語能力を駆使し、心と実践で介護者であろうと臨んでいくのではないでしょうか。言語の発達とともに通じ合う喜びも獲得しつつ常に適度な距離を保ちながら前進していける素地があるように思われます。なぜなら彼らは外国人であり日本語母語話者ではないので、決して他者との距離は縮まったとしてもなくなることはないからです。一番最後に述べたいことは、私自身が現在、母の介護をしており、そこから感じてきたことが今回の3点と重なるからです。母を見ていて痛感することは、彼女は「心の言葉」「心の会話」を望んでおり、それ以外は、何も「伝わらない」ということです。
学生たちにFeedbackを課していますが、その活動に今回の知見を活かしていきたいと思います。
本来は、ここまで書いたのち、この三分の一にまで文章を校正する必要がありますが、冒頭に述べたように、まとめること自体が大変になってしまったため長文での提出をお許しください。貴重な機会をありがとうございました。